

【巻頭言】

新時代に向けての品種分類

会長 清水 弘

平成の世も残り少なくなりました。戦後の花菖蒲界は昭和の高度成長期に起こった全国的な花菖蒲ブームによって多くの花菖蒲園が造成され、以後、消長を繰り返しつつも約200か所の花菖蒲園が現存しています。戦後は平和な世が続き花菖蒲ファンとしても、落ち着いた気持ちで毎年の開花を楽しんでいる時代でした。

ここで20世紀に入ってから歴史を市販書籍によって辿って見ましょう。(表-1)すると、今日の隆盛は四半世紀毎に登場した新たな品種群によって支えられてきた事が分かります。二十世紀初頭の明治36年(1903年)には、まだ堀切地区に在った品種群しか知られておらず、当時は花期の早晩による分類でした。昭和5年(1930年)には熊本で改良された品種群が東京で紹介されて、東京種と熊本種の二つとなりました。昭和32年(1957年)には三番手として伊勢種が加わりました。昭和60年(1985年)には長井古種が加わり、国内で育種された特徴的な品種群は四つとなりました。

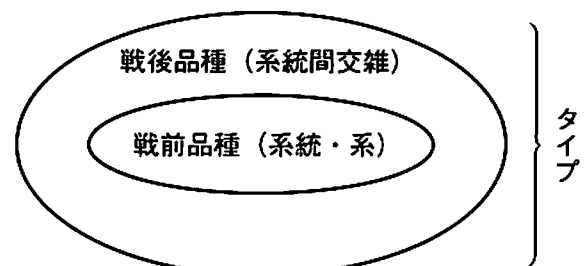
また、表-1からは各品種群の呼称には多くの変遷があったことが分かります。例えば江戸で改良された品種群は東京種→東京花菖蒲→江戸花菖蒲→江戸系などの呼名の変遷がありました。詳細は省きますが、呼名の変更は各著者の選好みと言うよりは社会的背景があったからです。今日多用されている〇〇系、〇〇系統という呼称は、各地域において少数の親から出発して、その血統の中だけで育種された戦前品種に当てはまる育種学上の用語です。戦後に登場した品種は別な系統との系統間交配によって生じたものが大半なので、〇〇系と呼ぶことが不都合となっています。

そこで、新元号の世では、それに替わって「タイプ」という形状やスタイルを表す用語を使用することに致します。(表-2)江戸タイ

プ、肥後タイプ、伊勢タイプ、長井タイプと呼ぶこととなります。タイプという言い方は、地域毎に確立されている園芸上の様式美(花容の共通特性とそれ独自の観賞方式)を踏襲、発展させて行こうという姿勢を含んでいます。戦前品種は仏像彫刻のような有形文化遺産であり、保全対象となります。その時代、そこに生きた人間がどのようなことを考えていたのかを如実に物語ってくれます。一方、戦後品種は戦前品種を教材として学んだ上で、現代的な視点から改良を加えたものです。改良を加えることを育種と言いますが、新品種を生む育種は根気強く続けなければなりません。何故なら、品種の減少がやがては花菖蒲文化の衰退につながってしまうからです。このことは、他の古典園芸植物を見れば明らかです。

本協会の先人達は次のように語っています。『世の人々に好まれる品種は次第に普及し、そうでないものはやがては消えて行く。そこに一定のレベルが出来上がり、それがその時代の花菖蒲文化である』と。伝統的な嗜好品である唐辛子の老舗では「これは昔の味と違っている」と時折、客から指摘されるが、実際は人々の味覚の方が変化していることによるそうです。花菖蒲の花型や花色についても人々の感じ方の変化が起こっているのではないのでしょうか。今日の日本人の感性と響き合う日本美を持った品種、皆が瑞々しく感じる品種を次世代に送り出す必要があります。本号の見聞き紹介された一般人気投票上位品種の紹介も、時代の変化を掴むための一種のアンテナですし、「タイプ」という新しい呼名自体も実は時代の要請とも言えます。

「タイプと系統(系)との関係」



*タイプは全体であり中心に〇〇系統を含む

*タイプは〇〇系統に内在す美意識が核となる。

表-1 市販書籍等における花菖蒲の品種分類

2018年1月3日 清水 弘 調査

発行年	書名	出版社、出筆者	分類名称
1903年 (明治36年)	水栽四君子	東京三田育種場	極早生、早咲、中咲、後咲
1930年 (昭和5年)	牡丹花菖蒲の作り方	誠文堂 石井勇義著	堀切に於ける花菖蒲の品種 熊本花菖蒲の品種(熊本種)
1931年 (昭和6年)	日本花菖蒲協会 創刊号	日本花菖蒲協会	東京種 熊本種
1935年 (昭和10年)	花菖蒲の培養法 会報特別号	日本花菖蒲協会	東京種 熊本種
1936年 (昭和11年)	花菖蒲の研究	神奈川県農事試験場 宮沢文吾著	ハナショウブ、熊本花菖蒲、「伊勢の松阪には特別な品種が発達した」との記載あり
1940年 (昭和15年)	花菖蒲の作り方	博文館 池田喜兵衛著	東京花菖蒲 熊本花菖蒲
1957年 (昭和32年)	花と蔬菜の育種	誠文堂新光社 西田一声著	東京種、熊本種 伊勢種
1959年 (昭和34年)	花菖蒲	加島書店 平尾秀一著	東京花菖蒲、熊本花菖蒲 伊勢花菖蒲
1971年 (昭和46年)	花菖蒲大図譜	朝日新聞社 栗林元二郎、平尾秀一 共著	江戸花菖蒲：堀切地方にあった品種、及び長井市あやめ公園保存9種含む 肥後花菖蒲、伊勢花菖蒲
1973年 (昭和48年)	花菖蒲入門	池田書店 日本花菖蒲協会監修 石阪晋作著 (平尾秀一著)	江戸花菖蒲(東京花菖蒲) 肥後花菖蒲(熊本花菖蒲)、伊勢花菖蒲 *用途別一覧表では、江戸系、肥後系、伊勢系等の記載有り。
1974年 (昭和49年)	花菖蒲	泰文館 富野耕治著	東京(江戸)ハナショウブ 肥後ハナショウブ、伊勢ハナショウブ
1975年 (昭和50年)	作業12か月② ハナショウブ	日本放送協会出版部 富野耕治著	江戸系、肥後系 伊勢系
1976年 (昭和51年)	園芸ガイド3 花菖蒲-アヤメ類	保育社 富野耕治著	江戸系、肥後系 伊勢系
1981年 (昭和56年)	最新花菖蒲 ハンドブック	誠文堂新光社 平尾秀一、加茂元照著	江戸系、肥後系 伊勢系
1985年 (昭和60年)	別冊家庭画報 大山蓮華、花菖蒲、 紫陽花	世界文化社 加茂元照著	江戸系、肥後系、伊勢系 長井古種
1999年 (平成11年)	人気品種と育て方ハ ナショウブ	NHK出版 日本花菖 蒲協会(一江豊一著)	江戸系、肥後系、伊勢系 長井古種(長井系)
2007年 (平成19年)	色分け花図鑑 花菖蒲	学習研究社 永田敏彦	江戸系、肥後系、伊勢系、長井古種、長井系 江戸古花、伊勢古花、熊本花菖蒲

表-2 ハナショウブの品種分類表

日本花菖蒲協会編 (2019年)

- 本表は歴史文化的背景及び外観を中心とした花菖蒲の園芸品種の分類表である。育成者による新品種分類の際の目安とされたい。
1. 本分類では欧米のアイリス協会使用の呼称に合わせ、各々の品種群が成立した地名+タイプとする。(英文表記は複数形となる)
 2. 各タイプを戦前と戦後に二分した。戦前は各地域内で独自の育種目標により選抜されてきた系統であったものが、第二次世界大戦後に系統間交雑が開始された結果、系統という遺伝学的な括りが通用しなくなったことによる。
 3. 育種家名等を使用した育成品種とは、概ね十数品種以上が現存し一定の品種群を形成しているもの。
 4. 品種の普及や保存・継承を考慮して、品種名の付いた個体はいずれも同一クローン(同一個体由来の栄養繁殖したもの)に限定する。
 5. 花期は関東以西を基準とする。

分類	細分類	戦前品種の由来と特性、及び戦後品種の特性
江戸タイプ	戦前品種 江戸系(江戸花菖蒲) *発祥地である堀切では単に花菖蒲と呼ばれていた。 神奈川農事試験場育成品種	由来: 江戸時代、各地から集められたノハナショウブの変異個体を元に改良された品種群で、遺伝的、形態的に種々雑多なものを含むが、多くが性質強健で風雨に強く花菖蒲園での觀賞や栽培に適する。また堀切地区では切花営利栽培が盛んであった為、切花向き品種も含んでいる。現在、葛飾区立堀切菖蒲園や明治神宮に保存されているが、詳細に見ると同名異品種が複数存在する。なお、松平菖蒲の育成品種は菖蒲花と呼ばれる。
	戦後品種 古江育成品種 伊藤育成品種 押田育成品種 平尾育成品種 加茂花菖蒲園育成品種 清水育成品種	草型: 花茎は葉上に出て枝咲性種あり。葉性は硬直で直葉が多い。 花型: 三英、六英、八重咲、玉咲等変化し、花径も大小種々あり。(多様性あり) 花卉: 外花被は横開張。内外花被共に一定型がない。葉片は中位で花卉間にやや隙間あり。 花色: 花色、配色共に変化に富む。 花期: 極早生は5月下旬から、他は6月上旬から下旬にわたる。 草勢: 強健 戦後品種: 外花被が横開張する伝統的花型を中心とするが、他系統との交配による中間型のものや肥後、伊勢、長井タイプの花型に取まり切れない雑多なものも含む。
肥後タイプ	戦前品種 肥後系(肥後花菖蒲) *発祥地の満月会では熊本花菖蒲と呼ぶ 西田栄芳園育成品種	由来: 江戸から伝わった松平菖蒲の品種を元に熊本の満月会において改良された品種群。開花した鉢植えを室内に持ち込んで觀賞するため、大輪の外花被同士が互いに重なりあって豪華に垂れるように改良された姿には誰もが圧倒される。特に、雌しべ(芯)の大きさや立ち具合が鑑賞ポイントとなる。
	戦後品種 光田育成品種 平尾育成品種 押田育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	草型: 花茎僅かに葉上に抽出、時に分枝、葉幅広くやや垂れ葉 花型: 六英を普通とし、三英(内花被は緩く立上る)や八重有り、花径は巨大量を有する。 花卉: 外花被が大きく展開し、雌しべや葉片も大型で立ち上がる。 花色: 本来は紫・紅紫・白色が主であるが、現在は他の色彩や配色が加わっている。 花期: 6月中旬からの晩生が多い。 草勢: 中位で繁殖力がやや弱い。 戦後品種: 他系統との交配によりやや中間型となっているが、六英を中心とする豪華で重量感のある花容を備えて武士の威厳と重厚な儒教精神を表現しているもの。
伊勢タイプ	戦前品種 伊勢系(伊勢花菖蒲) *発祥地の松阪市では松阪花菖蒲と呼ぶ	由来: 江戸時代、松阪地方において鉢植え室内展示目的に改良された松阪三花の一つ。中輪の外花被は重なり合いながら、大きく下垂するという優雅な特性をもつ。葉片の鶏冠(蜘蛛手)や縮緬の弁質は花卉全体の淡い色彩と相まって繊細優美な姿を見せる。伊勢神宮や斎宮の存在と綿花栽培の風土で培われた独特の優雅さを表現している。
	戦後品種 富野育成品種 前田育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	草型: 花茎と葉長ほぼ等しく分枝せず。葉幅やや狭く直葉が多い。 花型: 三英を本来とする。花径中位 花卉: 外花被は縮緬地薄弁で下垂、内花被は抱え立つ。葉片は鶏冠状を呈する。 花色: 清楚で淡色なものが多く。 花期: 6月上旬から始まり下旬まで。 草勢: やや弱い。 戦後品種: 他系統との交配によりやや中間型となっているが、三英垂咲の優美な花容を残しているもの。
長井タイプ	戦前品種 長井古種	由来: 山形県長井市あやめ公園で戦前より収集されていた栽培集団より、昭和34年に見出された品種群で、小輪で素朴な姿のために江戸時代初期品種群の姿を彷彿とさせる。
	戦後品種 長井あやめ公園育成品種 加茂花菖蒲園育成品種	特性: 草型、花型が長井産ノハナショウブに近いものから花色・花径等が豊かになり栽培品種との中間的形態を示すものまでを含む。草勢は強健で株更新の間隔が空けられる。 戦後品種: 左記の2群は片親を長井古種とする。自生地ノハナショウブと栽培品種との間で生じた浸透交雑種、及び自然変異タイプと栽培品種間の人為交配による初期世代も長井古種に近似の形態を示し、何れもがノハナショウブの面影を残している。先駆的・象徴的な存在である長井の地名を冠し、これらすべてを長井タイプと呼ぶ。
自然変異タイプ	戦後品種 国内発見種 国外発見種	由来: 自生地で発見された標準的ノハナショウブとは異なる形質を持つ自然突然変異の株分け個体 特性: 花型、花色、配色等の点で觀賞価値が高いと見なされるもの 特記: 自生地に見られる標準的な個体をプロトタイプと呼ぶ。
外国品種	戦後品種 米国品種が中心 *他にロシア品種等がある。	由来: 日本から導入した品種をもとに、戦前より米国中心に育種が進んでいる。 特性: 戦後暫くは江戸系の面影を残していたが、その後はより色彩鮮明に改良されている。特に六英咲では雌しべが変形して花の中心部が賑やかなっているものが多い。 特記: 米国ペン氏の品種は我が国である程度普及したが、それ以後の品種は普及には至っていない。しかし強健で鮮明な色彩を持つので日本品種との再交配が期待される。
種間雑種	戦後品種 キハナショウブ 加茂花菖蒲園育成品種 清水育成品種	明治時代に欧州から輸入されたキショウブと花菖蒲との間の種間雑種は、小輪だが花菖蒲にない純黄色やその他の色彩を持っている。不稔で正常花粉や種子が出来ず、外来植物であるキショウブのように水路伝いに種子が逸出して自然繁殖することはない。但し、四倍体キショウブとの雑種(堺の黄金及びチャンス・ビューティ)は僅かな稔性があるので、花菖蒲園での栽培は避けた方がよい。